

みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

名古屋モザイク工業 Design Award 2019

表彰式開催!

岐阜県多治見市の総合タイルメーカー・名古屋モザイク工業(株)は、タイルを使用した施工事例を募集し、コンテストを開催。第4回となる今回の応募総数は454件(住宅部門297件、非住宅部門157件)。審査により金賞・銀賞・銅賞・入賞、また今年新たに創設したリノベーション賞が選ばれた。

10月10日(木)、新宿パークタワーホール1階ギャラリー1(東京都新宿区)にて表彰式を開催した。



受賞者にはタイルで制作した楕を贈呈。



10月8日～10日の3日間、同じ会場にて新作タイル発表会も開催。



事業企画:東急不動産株式会社 施主:株式会社ハヤノ通商
施工:株式会社早野組 東京支店 建築設計:株式会社フォルム建築計画研究所
内装/外観デザイン設計監修:株式会社to-ripple 撮影:エスエス東京

「CAMPUS VILLAGE 元住吉」

株式会社to-ripple

設計者コメント



CUT:見方を変える、視点を変える
新しい学生レジデンス

切り方を変えるだけで、違うものに見える。オナマのレンガをナナメに"cut"し積み上げる事で、凹凸感の異なる面白いファサードになる。学生寮のエントランスにおける壁の演出として使用した。凹凸感が異なるため、アイストップとしてお出迎えする印象的な壁の見え方と、外出するときの送り出す優しい見え方。異なる見え方をする1枚の壁がこの学生寮を形作る。

株式会社to-ripple
枋尾 直也 氏、斎藤 麗 氏

「志摩地中海村」(三重)

株式会社竹中工務店



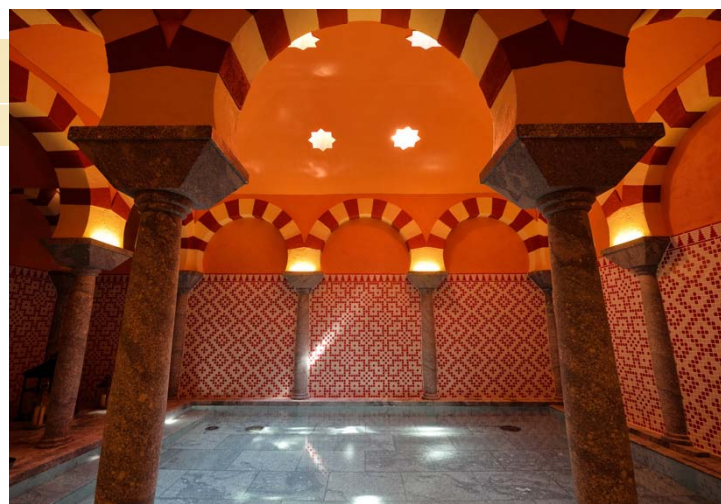
設計者コメント

中世 地中海世界の空気感

本建築は、地中海の古い集落をテーマにした志摩のリゾートホテルで、開村25周年の増築計画です。異国の集落に住んでいるかのようなホテル、中世地中海の空間、空気感を、集落の浴場や客室で再現しようと試みています。特に浴場は、中世の系譜を考察し、壁をタイルで覆った天窓のみの地下的空間としました。日本の環境に合わせて磁器質11種類を鑄込で特注しました。



株式会社竹中工務店 永岡 久 氏。手にした特注タイルは多治見のタイルメーカーが製作。



設計・施工:竹中工務店 撮影:エスエス 内山 雅人



「芦屋の邸宅」

株式会社デザイングラウンド55



設計者コメント

究極のもてなし。

家族で過ごすプライベートな空間だけでなくゲストを招いて共に食事や会話を楽しめる、パブリック性も兼ね備えた住宅。

建築設計:KENZO architects&associates

施工:株式会社アンドエス

照明計画:株式会社ニューライトボタリー

撮影:ad hoc 志摩 大輔 フォトアート:paillette 水間 隆

「東京和食 ichi」(東京)

株式会社 カサハラデザインワーク



設計者コメント

ASANOHA

麻の葉の文様をデザインテーマとしています。いくつも連続して永遠と繋ぎ合わせることができる最もシンプルな形。日本文化を海外に発信することを目標としてお店の繁栄、和食の繁栄、日本文化の繁栄の願いをデザインに込めています。

設計:株式会社カサハラデザインワーク 施工:株式会社VIDA Corporation
撮影:ナカサ&パートナーズ



「T様邸」

住友林業株式会社 高松支店



設計者コメント

和風エレガンス

麻の葉の持つ、様々なテイストに対応できる特色を活用し、デザイン張りを行いました。施主も仕上がりに喜んでおられます。

設計・施工・撮影:住友林業株式会社 斉藤 鷹輔

「restaurant ninosa」(静岡)

株式会社 創造舎



設計者コメント

モザイクパターン

25角のモザイクタイルのパターン貼りでカジュアルな店の雰囲気演出しつつウォールナットの建具や家具で空間を引き締めた。モザイクパターンはオーナーがイタリアで訪れたトラットリアの雰囲気を再現する為、「アートモザイク施25角」からカラーを4色選定し、1色はマット調の黄色を入れて再現をした。

設計・施工:DESIGN OFFICE SOZOSYA



「タイルという素材の魅力を引き出す」

各賞の表彰を終えた後、審査員4名が審査方法や受賞作品についてコメントした。



塩田 健一 氏

月刊『商店建築』編集長

審査をさせていただいて3回目になり、年々応募作品の質が向上しているのを感じています。これまでは審査員がつけた点数の集計のみで金・銀・銅賞を決めていましたが、新しい試みとして審査員全員が集まって審査会を実施したことで、視点を広げた選出ができたと思います。前回まではタイルを使った面積や、空間全体がうまくデザインされているかが選考のポイントでした。そこは視点の一つではありますが、今回はタイルの魅力や、タイルの表情を引き出す使い方をしているかを重要視しました。来年もタイルの可能性をみなさんに発掘していただいて、またこの場でお会いしたいと思います。



アストリッド クライン 氏

建築家

審査をさせていただいて2回目です。タイルは大きさや色も様々で、いろいろなインテリアに合わせられます。審査では今度はどんな作品が出てくるのかと楽しみです。日本では「渋いほうがいい」とも言われますから、「志摩地中海村」の提案は勇気が必要だったと思います。思いきったカラーを使っていて嬉しいですね。ちょっとリスクですが結局ウィンするんです。フォロワーが増えて、みんながもっとカラフルなモザイクを使うようになると思います。



住宅ではニュートラルで落ち着いた感じがなくて惜しいのですが、そのなかで「gap」(住宅部門・入賞)がうまいなと思いました。住宅でも、デザイナーもお客様たちも勇気をもって楽しくタイルを使ってほしいですね。

猪熊 純 氏

建築家

今回初めて審査員をさせていただきました。タイルは、いろんなことができるとともに難しい素材だなあと改めて感じました。タイルはそれぞれ色、つや、スケール、イメージが違い、ベストなものを選ぶのは大変です。受賞された方は周辺の環境との調和も含めて、それが上手だったと思います。とくに金賞に選ばれた作品には刺激をいただきました。「CAMPUS VILLAGE 元住吉」では加工の仕方も工夫されました。これは名古屋モザイクさんとの関係もあって成り立つものであり、素晴らしいですね。「志摩地中海村」は、思いきって鮮やかにすることで、とても雰囲気のあるリゾートになっています。新しい取り組みをされている方たちに負けていけないなと思いました。



早田 辰比呂 氏

名古屋モザイク工業 代表取締役

本日はありがとうございました。デザインアワードは今年で4回目を迎えました。私どもはタイルのデザインや使用用途、特性などの紹介はできますが、どのような空間をつくり上げることができるのかという創造性の部分までは十分にお伝えできていないのが現実です。今回の作品はタイルという素材をうまく使い、魅力ある空間をつくっていただきました。タイルが素晴らしい素材であることを伝えるのが私どもの使命です。来年も開催しますので、ぜひいい作品をつくって、ご応募いただきたいと思います。



左: 表彰式の終了後、審査員によるトークショーを開催。テーマは「色と素材で生み出す空間のオリジナリティー」。

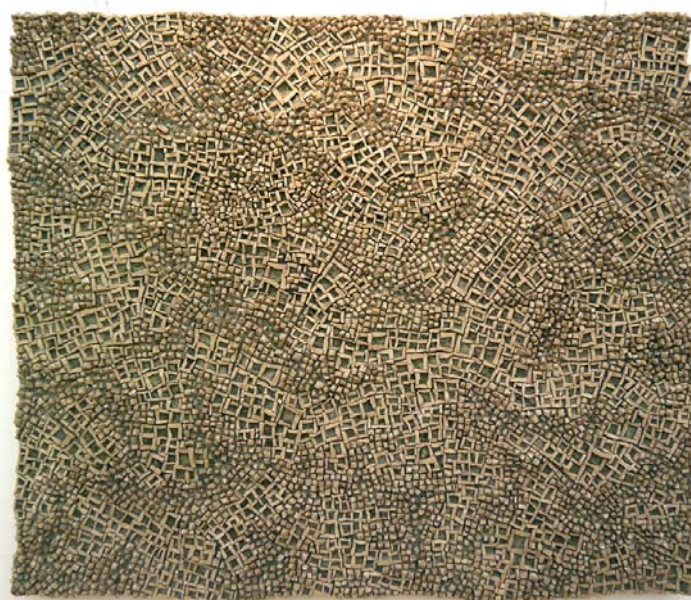


右: 受賞者と審査員、早田社長で記念撮影。



モザイク展 2019 開催！

10月2日(水)～7日(月)、横浜市民ギャラリーあざみ野(神奈川県横浜市青葉区)にて、「モザイク展2019」が開催された(主催:モザイク会議、後援:多治見市モザイクタイルミュージアム、名古屋モザイク工業株式会社)。今年は公募展として、会員の作品とともに公募作品を展示。海外からの招待作家による作品も展示された。



大賞

妙川 幸子
「Long absence(長い不在)」



作品について語る妙川 幸子 氏。



二席

森 敏美「AMBIVALENCE 1909」

モザイク会議は、1997年から2年ごとに公募展を開催。今年で13回目となる。51点の作品から、大賞、二席、三席、佳作2点、多治見市モザイクタイルミュージアム賞、名古屋モザイク賞が選出された。

会期中の5日(土)は、午前中にモザイク作家・喜井 豊治 氏による「モザイク史概説」のレクチャーを開催。午後は審査員の村田 真 氏、藤原 えりみ 氏により、出展作品の講評会が行われた。大賞から三席の各作品への講評は以下のとおり。

大賞

大賞 妙川 幸子 氏
「Long absence(長い不在)」

村田 氏「ざらざら、でこぼこの効果があります。モザイクならではの表現がいいと思います」

藤原 氏「石の素材感とリズムといった触覚的に誘発される要素が強い作品です。難民キャンプや都市など、人が関わった痕跡を感じさせる大地を思い起こさせます。ドローンによる空撮風景を思わせるスケール感が魅力的ですね」

今野 栄子「青い石」

三席



最年少の出品者・高校生の三宅 尚太 氏の作品について講評する審査員の藤原 氏(左)、村田 氏(右)。

*モザイク会議:モザイクアートの発展と普及を目指し、モザイク作家たちにより1995年に設立された団体。



なかの 雅章「大坂 夏の陣」

佳作



多治見市
モザイクタイル
ミュージアム賞

櫻井 拓也
「opens widely」



佳作

碧 亜希子「Cycladic air」



名古屋
モザイク賞

薄羽 由実子
「眠り」

三席

森 敏美 氏

「AMBIVALENCE 1909」

村田 氏「(作者が参照したという)『ねじ式』は、世の中が動乱していた60年代、ぼくらの世代にとって代表的な漫画。モザイク作品で社会的なメッセージを発信するのは珍しい。そこを評価したい」

藤原 氏「古材のトタンなども用いています。非常にメッセージ性の強いコンセプチュアルな作品ですね」

三席

今野 栄子 氏

「青い石」

村田 氏「モザイクは古代遺跡にも存在し、昔の断片的な記憶を思い起こさせるもの。この作品は、モザイクの歴史を宿しているようで面白いですね」

藤原 氏「モザイク作品は平面と思っていたら、こういう発想もあるんですね。手が混んでいて、作業の蓄積が魅力的で、自然物のようにも見えてきます」

講評会の後、受賞者に表彰状が手渡された。

会場では、あわせて海外招待作家の作品10点を展示。ギャラリー2階では「蒼宇モザイク教室展」「モノクロモザイク展」を同時開催。また、講評会后にイスラエル作家・エドナセゲフ氏と、オーストラリアの作家・ウェンディ エドワーズ氏によるスライドトークショーが開催された。



2020年1月25日から、作品の一部を多治見市モザイクタイルミュージアムの特別展にて展示予定。



タチアナ ドゥボウスカヤ
「春夏秋冬」



ヴェルディアーノ マルツィ
「アイコンのようなもの」

海外招待作家の作品

(一部作品)



フリウリモザイク学校
「G.De.Nittisへのオマージュ」



マチルダ トラセウスカ
「水族館」

ウェンディ エドワーズ
「小鳥の言うことにはこれはハリネズではない」

海外のモザイク作家によるスライドトークショー

イスラエルの作家・エドナ セゲフ氏は、同国でシナゴーク(ユダヤ教の会堂)、イスラムや初期キリスト教の空間、民間や公共の建物に施されたモザイクが日々発掘されていることを報告。後半では自らのモザイク作品を紹介。「モザイクは大方の人たちにはかたくて冷たいものと思われているが、私にとってはやわらかくて温かいもの。心を落ち着かせてくれるものです」と語った。

続いてオーストラリア(タスマニア)の作家・ウェンディ エドワーズ氏が、自然に囲まれた暮らしとともに、陶磁器やガラスなど様々な素材を用いて制作した自らの作品を紹介。タスマニアでは、モザイク作品はパブリックアートとして親しまれていると話す。あわせてオーストラリアの7人の作家の作品も紹介。



モザイク作家のウェンディ エドワーズ氏(左)と
エドナ セゲフ氏(右)



ウェンディ エドワーズ氏の作品。



エドナ セゲフ氏の作品。